人文学報 No. 517-2（社会人類学分野 14）
東京都立大学人文科学研究科、2021. 3

「ゴッド・イズ・グッド」
――ガーナにおける汚職とそのペンテコステ派教会による見せかけ[訳注1]――

ギリッシュ・ダスワニ
石田慎一郎・河野正治（訳）

Ⅰ　はじめに

2017年8月14日、ガーナ中央銀行はUT銀行ならびにキャピタル銀行の事業免許を剥奪した。そして、約1年後の2018年8月1日に、中央銀行はその他5行の事業免許を取り消し、それらを統合して「コンソリデイティッド銀行」を設立した。それらは、資本金と株式保有ともにガーナ国内を拠点とする銀行で、業界では「国産銀行（インディジナス・バンク）」と呼ばれていた。一連の業務停止措置の最大の理由は、いわゆる不良債権の処理と肥大化という問題だった。中央銀行は、それらの銀行の債務超過が業務停止命令および経営統合の主たる理由だと表明した。それ以外の理由は、それらの銀行の一部による事業免許取得に不正があったこと、資金運用に瑕疵があったこと、投資家から調達した資金を筆頭株主が不透明なかたちで使用した疑いがあったことなどである。最近のガーナにおけるこの出来事は、以来「ガーナ銀行危機」と呼ばれ、国による9つの民間銀行の業務停止措置を招いた。

本論文で私が注目するのは、それらの銀行のひとつであるキャピタル銀行、そしてガーナにおけるペンテコステ派／カリスマ派教会[訳注2]の顔として知られるメンサ・オタビル牧師とこの銀行との密接な関係である。オタビルは、インターナショナル・セントラル・ゴスペル・チャーチ（ICGC）という名のカリスマ派教会の主宰者であり、ガーナで最も有名かつ高所得の牧師である。彼は、自ら創設したキリスト教系私立大学の学長を務め、製薬会社の会長（チェアマン）であり、コンサルタント会社を経営しながら各方面のシンクタンクや諮問委員会に身を置いている。オタビルは、2015年にガーナで最も影響力のある人物に選定され、2018年にはレピュテーション・ポールの「アフリカで最も評判のよい100人」に選ばれた。だが一方で、同じ2018年に、彼はキャピタル銀行の破綻を引き起こした張本人として告発された。会長であり株主でもあったオタビルは、キャピタル銀行が中央銀行から6億1000万ガーナ・セディ（1億1600万米ドル）の流動性支援（リクイディティ・サポート）を受けた際に、疑惑の投資決定を決裁した取締役会の一員だった。この資金の大部分が、「事業推進」と「企業イメージの改善」を表向きの理由に、豪勢な海外旅行に費やされたといわれている。銀行の業務停止に至った経緯が明らかになると、多くのガーナ人は、キャピタル銀行の事件をその他最近の「コラプション・ス

キャンダル」と比べてみるようになった。その一例は、ガーナ人ビジネスマンのアルフレッド・ワヨメが、「水増し請求」（create, loot, and share）[訳注3]の手口と高裁が認定した方法で政府から資金5100万セディを詐取したと告発された事件である。加えて、一部の見立てでは、顧客から預かった資金を本来の資金運用方法とは異なるかたちで流用する各種のポンジー・スキームもあった。そのうち最もよく知られたのは、何千人もの出資者を集めた金（きん）の取引企業であるメンズゴールド社である。被害者総数は在外ガーナ人を含めて最大数万人とみる推定さえある。銀行危機が生じて以来、企業家の金銭欲とコラプションへの非難が世間の話題になった。

ガーナにおいてペンテコステ派教会と金融機関の団体組織が重なることは意外ではない。オタビルは、アフリカの企業家に対する支援に確固たる信念を持ち、まさにそれこそがキャピタル銀行会長への就任を引き受けた理由のひとつだと説明する。だが意外だったのは、キャピタル銀行における疑惑の金融取引のことを彼自身が知っていたという見込みに対する、彼の応答（レスポンス）である。オタビルは、キャピタル銀行破綻においてコラプションの張本人だと告発された際には、銀行の経営状況については関知していないと主張した。自ら設立したキリスト教系私立大学であるセントラル大学の現職学長として発出した声明では、彼が務めていたのは銀行経営に直接関わらない非執行役員であり、日常業務について知る立場にはなかったとのことだった。オタビルが銀行破綻に荷担したとして告発された後、ほどなくして、あるビデオ映像がYouTubeで公開された。それはオタビルが会衆に語りかける内容で、銀行危機が明るみに出る前に撮影されたものである。ビデオのなかでオタビルは、銀行会長としての立場も金融市場の知識も、どちらも「常識」の問題だと説明した。加えて、自分は計算が得意ではないとも告白した。

> 私は、銀行業務についてのトレーニングを受けていませんが、銀行の会長です…しかしご承知のとおり、金銭とは理解しやすいものです。それがどこへ流れ、どこから流れるのかを見ればよい、それだけですから…単なる常識です。事実を見て、事実を精査し、事実のうちに答えを求め、それで正解が得られる。そんなに難しいことではありませんし、なにせ私は昔も今も計算が苦手です。しかし分かったのは、金融の現場で難しい計算は必要ないのです。足し算、引き算、収入、コスト、出費、それから純益…私にもできるのですから、そんなに難しくないということです。私は昔も今も計算が苦手ですが、分かったのは金融の現場で難しい計算は必要ないということで、単に足し算と引き算、それだけですから。

銀行破綻発表の直後、オタビルは、彼が主宰する教会の日曜礼拝での説教において、自分には会衆に対して「説明」する義務があると述べた。YouTubeで公開された説教のなかでのオタビルは「ゴッド・イズ・グッド、ゴッド・イズ・グッド、ゴッ

ド・イズ・グッド」と唱和した（「三唱」した）。オタビルは、キリスト教における神の善性（グッドネス）に目を転じることで、責任の所在を彼自身から遠ざけようとした[原注1]。そして、もし彼と彼の教会メンバーを疑う者が現れるならば、「ゴッド・イズ・グッド」と伝えなければならないと述べた[原注2]。多くのガーナ人にとって、オタビルの言葉は説明責任（アカウンタビリティ）と良き指導者像の根幹を破壊するもので、とくに彼がガーナにおけるコラプションに対する批判者として有名だったため、なおさらのことだった。だが、謝罪なき彼の姿勢に関するマスメディア報道は、議論を呼びつつも、世間一般の関心をほとんど惹きつけなかった。それどころか、オタビルの教会メンバーそしてネット上のフォロワーたちは、*#IStandWithOtabil*を掲げるソーシャル・メディア上の運動を立ち上げた。一部から批判の声も聞こえたが、ガーナにおいてペンテコステ派キリスト教信仰と明らかな繋がりをもつがゆえに、世間一般はむしろオタビルへの赦しに傾いていた。

宗教的価値観[訳注4]は金融化の拡大にどう交わるのか。什一献金やその他の献金といった宗教的義務が金融商品化することで、どのようにしたら、ガーナにおけるコラプションの語り口がペンテコステ派の相貌（フェイス）を呈するのか。私たちが見るべきは、神と人間との間の互酬的関係（ペンテコステ派信者が神に対して様ざまな負い目を感じるという関係性）にとどまらず、むしろ金融部門の命令的で不正なごまかしを含む二者関係のなかで、負い目が扱われてしまうことである。本論文で私は、ガーナにおけるペンテコステ派のキリスト教信仰と金融業界の説明責任との融合によって、「コラプション」とは何か――誰に対して説明責任を持つか（法、自己、さらには神）、自らの行為について大なり小なり説明責任をもつようになるのはどのような場合か――をめぐる問いがどのように開かれたのかを理解しようと試みる。私の見立てでは、グローバル・サウスにおける（たいていはWTO、IMF、世界銀行などの国際機関に由来する）地球規模でのネオリベラルな統治のためのテクノクラートの道具として現れた「コラプション／アンチ・コラプション」の語り口では、今日のガーナにおいてネオリベラリズムが道徳の問題として現れる情勢を十分に捉えきれない。「良き統治（グッド・ガバナンス）」等の概念が（とくにコラプションを批判する文脈で）ガーナの市民社会ならびにアクティビストによる抗議運動に合流する一方で、「キリスト教信仰の話（トーク）」を絡めた「コラプションの話（トーク）」によって、ガーナ人エリートと新興中産階級は、様ざまなタイプのコラプションを区別して、説明責任の追及をかわしている。本論文では、キリスト教式の告白（をしないこと）がガーナと米国とで同じようなかたちで見受けられることに、そして国家レベルの指導者たちがどのようにして罪責を免れてしまうのかに、あわせて注目する。

Ⅱ　コラプションのモラル・エコノミー

ガーナそしてその他グローバル・サウスの国ぐにでは、コラプションの語り口が、開発を妨げる「危機」そして然るべき歴史発展からの逸脱の話と結びつけられることが多い［Mkandawire 2001；Roitman 2014］。経済学者がコラプションを開発途上の一段階に現れる現象、あるいはレントシーキングの特定の形態として説明するならば、政治学者はコラプションを家産制的社会関係の残存の証と受けとめてきた［Mkandawire 2015］。そうした説明は、いかにして「コラプション」が植民地的な手あとを残しながら歴史的に変化する、象徴的に多義的なカテゴリーであるかを見過ごしてしまう点で問題があるし［Kroeze, Vitória ＆ Geltner 2018；Pierce 2016；Szeftel 2000］、犯罪者・政治家・グローバル企業が結託するなかで都合よく取り込まれてしまいかねず［Sanchez 2016］、さらには社会経済的不平等という複雑な問題を、単なる技術的介入の問題にすり替えてしまう［Li 2007］。今日のガーナにおいて「コラプションの語り口」は、標準的な意味あいを持つが、国民国家、国家制度、そしてそれを体現する者たちに返答し、かつ批判するための、そして未来への希望と過去へのノスタルジーを表明するための生産的（プロダクティブ）方法にもなっている（原注3）。

ガーナにおけるコラプションの語り口は、国民国家と政治エリートへの失望について人びとが公然と語るときに用いる、政治的レトリックである［Gupta 1995；Smith 2007；Pierce 2016；Muir ＆ Gupta 2018］。コラプションはガーナあるいはグローバル・サウスに限った社会現象ではなく、むしろ多国籍機関やグローバル経済の中心と周縁をともに含むが、ガーナ市民にとってコラプションの語り口は、政治に参加し、国家政策を評価し、ポストコロニアル国家に対する政治的批判を口にするための正当な方法なのである［Hasty 2005］。著書*Moral Economies of Corruption: State Formation and Political Culture in Nigeria*のなかで、スティーブン・ピアース［Pierce 2016］は、「コラプションのモラル･エコノミー」を国家資産の再分配をめぐる政治的評価と捉えた。つまり、それによって政治指導者の行いが解釈・評価され、「コラプション」のうちのある部分のみが容認可能とみなされることになるためだ。この論点を継いで私が強調するのは、コラプション容疑での告発の後にガーナ人教会指導者たちが表明した道徳本位の応答に着目することが重要だということである。

オタビルは、きちんとした説明あるいは「告白」よりも、ペンテコステ派的な道徳を抱く人びと（一般国民）むけの応答に傾いた。彼が「コラプションに手を染めかねない」としても（彼もただの人間に過ぎないし、計算にも疎い）、彼がそうでなかったのは、彼が常に神に対して説明責任（と負い目）を抱いており、そして「ゴッド・イズ・グッド」だからである。神の慈しみは純粋に与えられるもので、オタビルはそれを享受する資質を備えているわけで、「ゴッド・イズ・グッド」そしてオタビルも

グッドなのだということを全てのガーナ人は忘れてはならないというわけだ。だが、何をもってペンテコステ派の名だたる指導者にガーナの一銀行の会長を務める資格を与えたのだろうか。それが数学的知識でも日々の銀行業務にかかわる知識でもないとしたら、オタビルはいかなる専門的知識を持っているのだろうか。第一に、ガーナの銀行には月々やりとりされる什一献金と週ごとの献金を通じた現金（liquid cash）の確実なフローがあり、そのために教会は銀行にとって重要な顧客とみなされている。銀行業界にペンテコステ派牧師が関わることで、現金はそのために祈るべき存在となり、良い結末を引き出すための呪術的能力を授けられる。事実、ペンテコステ派の牧師たちが現金を受け取ると、他処に再投資される前に、それをもって会衆による金銭的出資があったと神が認知するとされる。神への金銭的な返礼が、純粋に与えられた救済に報いる唯一の方法であり、ペンテコステ派教会における什一献金は、「神の側に負い目を残す」ことで長期的利益を生み出すオルタナティブな社会契約に信者をつなぎとめるようとするものである。キリスト教的な考え方のなかでは、イエスの犠牲は真に報いることが決してできない負い目である。キリストへの信仰を続けることによってのみ、〔原初的な〕契約のもとで〔人間が神に〕感じる負い目は、〔神の恵みによって人間の側に〕委ね預けられたものに変わるのである［Stimilli 2017：120］。ペンテコステ派信者の多数にとって、そして「繁栄と成功の福音」によると、神に捧げることは、投資に対する収益（リターン）、そして健康・富・成功・成婚といった価値の実現を見込むことでもある。

モーリス・ブロックとジョナサン・パリーは、画期的な論集*Money and the Morality of Exchange*［Bloch & Parry 1989］において、贈与経済と市場交換の間の相互関係を検討した。（「純粋」あるいは「無償」のものとしての）「贈与」の観念は市場交換の対極にあるものとして示されたが、それはロマンチックな、そして西洋中心的な視点にほかならなかった［Bloch & Parry 1989：9］。金融市場経済が社会的・法的・経済的・宗教的取引のうちに常に、そして既に（マルセル・モースのいう「全体的給付」として）「埋め込まれている」と認めるならば教会に供与される現金は、人格を消去するものでもなく、個人のうちで完結するものでもなく、モラルに反するものでもない。金銭的出資を通じてキリスト者に捧げる贈与は、それを与える者のモラルと願望を含みこむ。つまり、現金の与え手と受け手とを聖なるかたちで結びつけるのである。かくして、オタビルは、ガーナの多くのキリスト教信者が知るペンテコステ派著名人として、「将来の収益（リターン）」という価値を疑いなく体現するがゆえに一銀行を確かに代表する地位を得たのだ。キンバリー・チョン［Chong 2018］が指摘するとおり、「一企業の本当の価値とは、将来の収益の実現総額のことである」。だが、投資家は、企業株式の将来的なパフォーマンスが何で決まるかを予測できないので、金融会社は「確信の語り口」を駆使して、重大な損失にも利益にも繋がりうる〔出資〕対象に向き合うよう自分にも他人にも働きかける［Chong 2018：40-41］。オタビルは、キャピタル銀

行創業者のアトゥ・エシエンと同様に、市場評価の不確実性に向き合うための知識（あるいは「コモンセンス」）を持つと主張したが、それは両名のペンテコステ派信者としてのアイデンティティに由来するのである。

Ⅲ　コラプションへのペンテコステ派教会の関与

ウィリアム・エトゥ・エシエンが創業したキャピタル銀行は、*First Capital Plus*という社名のマイクロ・クレジット会社として2009年に出発し、その後に（ガーナ国内で37支店を展開する）貯蓄貸付銀行となり、2013年に（ガーナ中央銀行が認可する）総合銀行となった。各方面でのインタビューのなかで、エシエンは、自身のペンテコステ派教会であるインターナショナル・セントラル・ゴスペル・チャーチ（ICGC）を称揚し、それが企業家としての彼のキャリアのきっかけだったと述べた。エシエンは、銀行株式を教会への什一献金ならびにその他の献金にあててもいた。2018年8月の破綻から一年後、ガーナ中央銀行は銀行破綻の背景理由に関する調査を完了した。ICGCの主任牧師だったメンサ・オタビルが銀行会長を務めていることも報道された。調査報告書によると、キャピタル銀行はガーナ中央銀行から6億1000万セディ（1億1600万米ドル）を受け入れて会社資本の再構成をすることになった。だが、銀行取締役会は、この流動性支援をその目的にではなく、新しい、しかも高リスクのビジネス、そしてソブリン銀行という名の新銀行設立のために使用した。ちなみに、この銀行もまた2018年8月に破綻した。

キャピタル銀行などの銀行は、投機経済と結びついた「ファースト・マネー」生産に関わっていた。すなわちそれは、実際の基礎収入の裏付けがないはずの収益を約束して、現金を次々にデリバティブ商品に投資し続ける手法である。だが、エシエンは、自分の銀行の収益可能性を確信し続け、早期退陣を求める政治的介入を非難していた。2019年9月、エシエンは「グッドイブニング・ガーナ」というテレビ番組でのインタビューにて、長時間を割いてイエスに対する自らの献身を語った。彼は、自分が神に仕え、聖書を手に語る「牧師」でもあると述べた。彼は、「農村から出て来て」首都に移り住んだ、つまり無一文から金持ちになったというサクセス・ストーリーを我が身のこととしていた。「だが、いうまでもなく、私は神を愛する」と彼はいう。エシエンは、自らが神に従い、什一献金やその他の献金を捧げるからこその報いを、彼のビジネスに投資する人びとから受けているのだと説明した。エシエンによるキリスト教的な企業活動の語りのなかで興味深いのは、ガーナ政府がキャピタル銀行に対して貸付にかかる利息を免除してビジネスの継続を容認すべきことを提唱している点である（「利息の免除（インタレスト・フォーギブネス）」）。（彼がそうしたように）経営上の大きな決断をなすうえで「誰が正しいかを見るのではない。何が正しいかをみるのだ」と彼は述べた。政治的指導者がみるべきは、「誰」によるどんな筋書きかということよりも、彼の銀行のような

銀行がガーナ人そしてガーナの未来のために「何」に取り組んでいるのかだと、彼は言った。

エシエンの語りは、プロテスタント信者個人の証に近づこうとする、アメリカ人（福音派）の「立ち直りの語り」(narrative of bouncing back) に似たところがある [Jackson 2012]。それらの物語の役割が重要なのは、そうしたパフォーマンス（発話行為）の成否が、克服すること（罪を乗り越えて〔祝福された〕キリスト者になること）をめぐる信者の語りによって決まるからである。だが、オタビルは、「謝罪」表明をせずに、彼自身のせいではない出来事の被害者として振る舞うことで公に謝罪しない態度を貫いた。彼は、「誰が（正しいのか）」という話題から「何が（正しいのか）」という話題に関心をずらし、自分が神のみに説明責任を持つと繰り返し主張し、幕引きにした。彼はメディア向けの書面のみでの声明のなかで、公に仕える者（パブリック・サーバント）であると自認し、キャピタル銀行危機に彼が関与すると、ガーナの経済振興を促し、アフリカ人の企業を支援するという彼自身の長期的目標の妨げになると説明した。神の精神そしてアフリカ人の企業家精神に対して説明責任を持つとする点はエシエンと同じである。だが、エシエンの弁明は失敗し（彼は横領の罪が確定した）、オタビルの弁明は成功した。それが「なぜ」かを理解するうえで重要な鍵となるのは、ガーナの福音派と政治におけるリーダーシップにとって彼が「何」を体現していたのかということである。

これはドナルド・トランプの例と（全く同じとは言えないまでも）似ているといえば中らずと雖も遠からずだ。トランプはいくつかの不正な（そして罪深い）取引で告発されてきたが、福音派コミュニティの支持を維持しつづけている。弾劾裁判に先立ちホワイトハウスの大統領に向けて両手を広げて祈りを捧げた福音派指導者たちの姿を想起するとよい。いずれの場合にも、自分たちが「誰」を支持するか（潜在的に不正な人物であれ）よりも、自分たちが「何」をしているのか（キリスト教信者としての理念や保守的な考え方を育むこと）の方がずっと大事だという理屈だった。ガーナでは、キリスト教の神は取引相手たりうる神であり、行き過ぎた罪（コラプションの罪）を高い価値を持つ聖なる目的（あるいは長期的にみて神そして国にとって良いこと）に変えてくれる存在である。多くの点で、ガーナはキリスト教国であり（国民の7割超がキリスト教信者）、オタビルの神の申し子としての名声のために彼を刑事訴追することが困難だったのである。

オタビルが刑事責任を免れたのは、単に「ゴッド･イズ･グッド」だからではなかった。オタビルが無傷のままにいられたのは、ある面では「キリスト教信仰」とキリスト教信者としての関係性をうまく使いこなす（つまり、神に誰よりも近づく）彼自身の能力とが結合したからだった。オタビルは、ほとんど何も語らずに、説明責任を神そして彼自身の聖なる善性に委ねることで、神を最終的な会計担当者（アカウンタント）だとする「キリスト教の話」に立ち入った。すなわち、もし神が（ネオリベラルな自己と同様に）関係に先立って存在するならば、オタビルの背後にいる者が神本人だったとして、その

者がいかにして不正（コラプト）だったといえるのか。ペンテコスタリズムがネオリベラリズムと結びついて、管理されるべき財産の集合体と人間をみるならば、神は究極の管財人ということになった。キリスト教信仰とネオリベラルな経済が（神そして市場への）服従の論理で働くとすれば、オタビルは神の法に、そしてガーナという国民国家を前進させていく力の源泉としての神に、権限を委ねた。そして、一切の不正告白を拒みつつ、オタビルは、神を相手とする互恵的な「取引」という言葉遣（レジスター）いに身を任せた。そして、キャピタル銀行の取締役会に対する道徳面での非難を緩めたのは、ほかでもなくガーナにおける彼の多くの支持者たち自身だった。

Ⅳ　道徳面での応答と盗み

道徳（モラリティ）とは、脅かされることで逆にはっきり理解されるものである。そのように道徳を捉えるならば、「銀行危機」へのガーナ人の反応の仕方を見ることによって、どのような価値観がいかにして表現されるのかを理解することができる。たとえば、ガーナ中央銀行の副総裁は、ガーナの銀行危機を「モラル・クライシス」と呼んだ［Daily Graphic Sept13, 2018］：

> その特徴として、価値観の崩壊、倫理に反する銀行、（中略）従業員の軽視、借り手が借金を返済しないカルチャー、悪事がおこなわれているときに見なかったことにするカルチャー、他者を犠牲にして個人的な事業を打ち立てるカルチャー、といったものがあげられる。

この批評のなかで、民間銀行（ローカル・バンク）は、従業員と借り手を含む利害関係者（ステークホルダー）への道徳的責務を有する社会的機関とみなされている。そこでの「価値観の崩壊」は「株主価値の考え方」が変わってしまったこと、すなわち、利害関係者らが個人的な利得のための金融化という目標に従うようになったことを意味している［Chong 2018：17］。しかしながら、コラプションとは、「価値観の崩壊」や、優良事業の対極にある破綻事業という以上の何かでもある。一連の危機は、制度化されたコラプションの出現を可能にする企業文化の一般的な価値観とむしろ深く結びついているからだ。重要なことに、新たな統治者と政党（新愛国党、すなわちNPP）が権力を掌握した2016年12月の選挙の直後までは、これらの（今では「違法な」）銀行事業の多くが容認されていた。そして「犯罪」と「コラプション」とを区別する必要がある。というのも、倫理に反する銀行業務という「カルチャー」がようやく犯罪視されるようになったのは、NPPが政権を掌握した後のことだったからである。2017年には、キャピタル銀行は、中央銀行からの融資をめぐって債務不履行に陥り、利害関係者とその未来への再投資事業を続けられなくなってしまったことから、ずさん（コラプト）な銀行経営として非難された（原注4）。

別の人類学者たちも、コラプションに関する法的判断と道徳的判断には違いがあると指摘している［Pardo 2004；Nuijten & Anders 2007］。そこでは「法的であるとされるものが、必ずしもひろく社会のなかで道徳的で正当とみなされるわけではないし、違法であるとされるものが、必ずしも非道徳的で非正当とみなされるわけではない」［Pardo 2013：125］ことが強調された[訳注5]。「汚職行為（コラプト・アクツ）」に関するさまざまな定義（そこには、在地の法の不履行、世間一般に認められていない事柄、有害な社会的帰結をもたらす行動などが含まれうる）は、つねに一致するわけではない。キャピタル銀行の事例で明らかなのは、少なくとも政権交代が起こるまでは、法と「コラプション」とが同じ権力的諸関係の基盤のなかに埋め込まれかねないということである。エシエンの確信と改宗の語りは、彼のペンテコステ派キリスト教信者としてののアイデンティティと彼自身の潔白とが結びつくという理解を広めようとするものだったが、そうはならなかった。テレビ番組におけるエシエンの表向きのパフォーマンスには、そのインタビューの直後になされた盗みの告発をはねのけるほどの力はなかった。エシエンのキリスト教信者としてのアイデンティティがその試練に耐えるほどのものだったなら、キリスト教の道徳観（モラリティ）が〔彼に〕求めていたことは、神への信仰がやがて「〔原初的な〕契約の上での〔神への〕彼自身の負い目を、〔神から〕管理人〔としての彼〕に『委ね預けられたもの』に変える義務がある」［Stimilli 2017：121］ことであったはずである。キリスト教の価値観は――たとえ市場に適合しても――市場によって損なわれはしない（アンコラプティッド）はずである。だが、エシエンは、むしろ自らの行為を短期的な利得に左右させていたように見えた――彼は自らのキリスト教信仰ではなく、強欲や個人的利益に侵され（コラプティッド）ていたのだと。その一方で、オタビルは、エシエンが自らの銀行を正当化するなかで彼に利用された被害者として語られた。両名が異なる道徳的評価を受けたという見立てが重要だ。両名に対する審判のうちに、市場をめぐる異なるモデルが同時に思い起こされた。つまり、エシエンが私利私欲に満ちた贈与（ギフト）の性質を表しているとしたら、オタビルは私欲のない贈与（ギビング）の精神であって、それが一人の堕落（コラプト）したキリスト教信者につけ込まれてきたのだ。オタビル自身は計算が得意ではなかったが、彼の支持者たちが、彼がどの程度に人格的な高潔さをもつかを判断し、オタビルが神のみに説明責任を負うと結論した以上、それで問題はなかった。それに比べてエシエンは幸運ではなかった。2019年10月、エシエンがテレビに登場してからひと月も経たない間に、彼はほかの3人とともに、銀行から盗みを働いた共謀の容疑で起訴されたのだ。

「アンチ／コラプション」と「説明責任」がアフリカのポストコロニアルを語る共通の語彙になっているとすれば、歴史的に見て、反植民地運動や、植民地的な統制による交易を拒絶する不買運動には、たとえば植民地資本主義者や支配階級に属する者たちを「ティーフ」（teef）と呼ぶといった、また別の言葉遣い（レジスター）がみられた。ナイジェリア人の人権活動家で弁護士のフェミ・ファラーナは、活動家で音楽家のフェラ・ク

ティとの会話について次のように振り返った――「彼は私にこう言った。『私にはよく分からない法律がそちらにはいろいろとありますが、詐欺や資金洗浄という観念はいったいどこから来たんですか。もし西洋人が盗みを働いていなかったというなら、詐欺も盗みも言葉として存在しなかったはずでしょうし』。フェラは、そのような英語表現を受け入れることに警鐘を鳴らしていた。ある男がティーフであると言おうものなら、その男の子どもは恥ずかしいと思うだろう。だが、ある男が資金洗浄に従事していると言ったところで、何も伝わらない」。ワンラヴ・ザ・クボロー――フェラ・クティの音楽のファンでもある――のようなガーナ人のアーティストは、これらのコミュナルな感情を共有していた。ガーナ人を欺いてきたオタビルやその他の支配階級のメンバーは非難される必要があるし、場合によっては「説明責任」や「コラプション」といった言葉の代わりに「ティーフ」と呼ばれる必要があると彼は考えていた。

図１　ガーナ人の風刺芸術家ブライト・アクウェによるイラスト

「ティーフ」という呼称は、コラプションに対する非難とは異なる、歴史的かつ情動的な参照点を持っている。銀行スキャンダルとオタビルの関与の知らせ、それに彼が応答した（ようで応答しなかった）直後に、風刺漫画家のブライト・アクウェは、この絵（図1）をソーシャル・メディア上で共有した。ワンラヴは、「Julor Kwakwe（Annointed Teef）」と題された歌のカヴァーとして、このイメージを使用した[(原注5)]。その歌で、彼はダンス音楽にあわせて、繰り返し「オタビルはティーフだ」と歌っている。彼はその歌のなかに、オタビルの説教から取った言葉を挿入している――「耳

にした嘘をすぐ信じてしまう。ご承知のとおり新生(ボーンアゲイン)重視のキリスト教信者はいちばん騙されやすい。なんと愚かなのでしょう」。2017年、ワンラヴは私とおしゃべりをしながら、制度的に権威ある立場にあるガーナ人が有する呪術的な力について語ってくれた――「たとえば、不正(コラプション)に手を染める際に、制服を着るという力のことを考えることができる――警察官として手を差し出すだけで、現金は呪術的にその手のなかに転がり込むだろうさ」。この邪悪な手口が達成されるのは、その詐欺行為が明るみになる瞬間でもある。当人にとっては、お偉いさんや政府や食品チェーンであれば、この呪術的な力が上昇するに過ぎないわけだし、その力は身につけている制服（や仮面）によってもたらされるものだ。ワンラヴは、オタビルを「ティーフ」と呼ぶことによって、オタビルの仮面を取り外してやろうとしていた。ワンラヴの歌を聞いてみると、「ティーフ」が一切の物を返すことなしに持ち去れば、受け取るべき者たちはもう受け取った（さもなければ、何かの手違いがあった）と偽りをいう。ワンラヴはオタビルを「ティーフ」と呼ぶことによって、盗みを金融取引のようなものに見せる際の呪術を受け入れなくてすむような口語的な言葉遣いが他にもあることを、ガーナ人にすぐに思い出させてくれたのである。

オタビルの悪名高い説教のちょうど数日後、フォキン・ボイスの第二のメンバーであるメンサ（M3NSA）が、「ゴッド・イズ・グッド」と題された歌をリリースした。これはピジン英語で歌われている（https://soundcloud.com/m3nsa/god-is-good/s-Sf0eG）。幾つかの言葉を拾ってみよう。

イエスは、あんたのためなのさ。
お金よこしたら、祈ってあげるのさ。
鍵があるから、開いてあげるのさ。
給料預けたら、倍にしてあげるのさ。
…
三唱しよう。万事はグッド。
万事はグッド。
ゴッド・イズ・グッド、ゴッド・イズ・グッド、ゴッド・イズ・グッド。
…
私が何を神に命じられたのかを問うなんて、あんたにはできない。
そんなことをしたら、塩になっちまう。
あんたは自分の金を私には投資できない。それからあんたは、
収益(リターン)がなければ私を訴える。
良心について私に話さないで。ナンセンスだ!
私が神の申し子であることを知っているのかい?

ブライト、ワンラヴ、メンサといったアーティストは、自分たちの作品を通じて、ペンテコステ派／カリスマ派の有力者（ビッグ・マン）のコラプションを批判しつつ、ガーナにおけるコラプションの見せかけを見破った。貧しき者や経済的に抑圧された人びとが関与する場合にはコラプションをモラルに反する問題と言い表し、キリスト教の指導者や政治家が関与する場合には慈悲と理解を期待する論理にも、その批判的視点は向けられている。ブライトによると、メンサ・オタビルのようなキリスト教の指導者は「この国の多数の人びとの宗教的な感性をある程度代表している。（中略）彼らは多くの人びとが仰ぎ見る不動の存在である。（中略）彼らはある種手出しできない地位を得ている。（中略）だからこそ、私が作品のなかに彼らを登場させるとき、その作品はときに皮肉っぽく、そうした理解を揺さぶるものになっている」。そのような風刺芸術における一連の作品のなかに見えるものは「皮肉・憤慨・挑戦の表現」であって、その意図はポストコロニアルの政治を批判し、同時に「貧しき者にも尊厳があり、モラルに支えられた値打ちがある」と表現することにあるのだ［Barber 2018：12］。

V　結論――ガーナで神に負い目を感じること

これまでの研究のなかで私は、まさしく「ものごとを行う」［Pierce 2016］（訳注6）という点で、「コラプション」という言葉の生産的（プロダクティヴ）側面をみている。これはガーナにあてはまる。ガーナでは、多くの者が「コラプション」という言葉を自らの目的のために流用してきたし［Pierce 2016；Smith 2007；2018］、コラプションに対する人びとの反応には、その他の社会的諸関係を生みだす情動的な言葉遣（レジスター）いや、キリスト教なども含めて、その他の情動的な言葉遣いが含まれうる。アンチ・コラプションと透明性（トランスペアレンシー）の運動を取り込んできた普遍主義的なコラプション言説の流布を背景として、1990年代以降には、ガーナのような国でも「コラプション」（とキリスト教）についての語り口が確実に増加してきた。いいかえると（「市場」についてのデヴィッド・グレーバーの描写と同様に）「コラプション」はじっさいには経験可能な客体ではない。むしろ「コラプション」は、それを経験的なリアリティとして見せかけるために、まさにそのために必要な政治的作為を求める。さらに、複合的な（法・道徳・宗教に同時に関わる）一連の行為のうちに、すなわち「全体的給付」と記述されうる一連の行為のうちに本来備わる複雑性を選り分けて、〔人びとにとっての〕ただ一つの思考対象として翻訳するうえでも、政治的作為が求められるのだ。

コラプションに関するこうした抽象的なモデルは文脈ごとに異なる意味と結びつく。それらあらゆる意味内容の結びつき（アーティキュレーションズ）において「負債」（あるいは、負い目を感じること）は要となる。たとえば、ガーナが国全体で金融危機に陥るということ自体（それは、どの政党が権力を握るのかにかかっている）にも、国家が投機市場の成長のまさに中心にある可能性、あるいは国家がそうした倫理に反する活動を停止させる

ための力点となる可能性が示されている。そこへガーナにおけるペンテコステ派キリスト教信仰は、一連のオルタナティブな倫理的規則と、そうした金融市場経済に容易に埋め込み可能な取引の論理を提供する。ガーナ人は国家に負い目を感じるものだが、それとまったく同じように、多くのガーナ人がキリスト教の神にも負い目を感じている。このような神への負い目は、イエスとその媒介者への投資を通じた未来の収益（リターン）の可能性を生み出す。だが負い目をめぐるこれらの話には〔その他の可能性に対して〕倫理的な制限を設けてしまう面もある。というのも、複雑に絡み合った歴史を理解しようとするさいにもオルタナティブな話の運びを許さないからだ。「コラプション」は、社会的な現実のうちの、ある特徴だけを選び取り、その他の特徴を意図的に見ないようにすることによって構築されるモデルになる。ガーナの事例では、ペンテコステ派教会の指導者が神に対して説明責任をもつという理由で、金融の「コラプション」がそういった指導者とあまり結びつけられることがない。グレーバー［Graeber 2009：125］が論じるように、負い目に関するいろいろなイデオロギーは、「暴力によって創られ維持される人間関係を、道徳（モラリティ）に根ざしているかのように見せかける、最も効果的な唯一のやり方」でありうるのだ。

ところが、アーティストたちはいち早く、「コラプション」に関するネオリベラルな言語を拒絶したり、盗みを取引に見せかけるための呪術を拒絶したりする口語的な言葉遣いを、ガーナ人に思い起こさせた。本論文で取り上げたアーティストたちは、「コラプション」を金融危機の核心とみる理解のしかたに抗う語り口を示している。それどころか、彼らは、ガーナ政府やペンテコステ派キリスト教信仰が平等を創りだすことに真に取り組んでいたという前提を問題にし、彼らにとっては明らかな、新たな形態の不平等を非難したのである。これらのアーティストたちは、ガーナのポストコロニアルへの風刺的な見方を共有していた。それは、キリスト教とネオリベラリズムが一体化した先の未来というモデルでは楽観も希望も得られないとする見方である。その風刺的な作品を通じてこそ、彼らは、ペンテコステ派キリスト教信仰とネオリベラリズム下のモラル・エコノミーとがひとつに収斂していくやり方を批判し、現在の不確定性に向き合っている。つまり、ネオコロニアルな価値観とネオリベラルな価値観がともに確かなものとはいえないという意味での不確定性に対峙しているのだ。ブライトが私に言ったように、「世界を異なるように理解しようと努めることによって、ひょっとしたら、我われは、世界に対する我われの経験を変えることができるだろう」。

原注

1） アンチ･コラプションを掲げる圧力団体Occupy Ghana所属のアクティビストが「グッド」という言葉を使っているのは興味深い。この団体には、「グッド〔・ガバナンス〕」（良き統治）をIMFと世界銀行のような国際機関が提唱するネオリベラルな「開発」モデル［Hammett 2018］と密接に絡み合うと考えるメンバー

もいる。1992年に複数政党制がガーナに導入されて以降、皮肉なことながら「良き統治」などの概念がアクティビズムのうちに入り込み［Ferguson 2010］、反「コラプション」と同義となった［Mair & Gupta 2018：6］。「グッド」なるものをめぐるアクティビズムは、民主主義の促進のために市民の関与と参加が重要とみる地球規模でのネオリベラルなアジェンダ［Hammett 2018：71］そしてアンチ・コラプションをめぐる諸々の語り口［Hasty 2005］を手にするが、未来をめぐるネオリベラルな観点を体現する者とは、エリートでもある。

2） 教会会衆へのオタビルの応答については次の動画を参照。
https://www.youtube.com/watch?v=WFCKGAwlzZg

3） コラプションを理由とした政治指導者への告発は、ガーナ独立後の初代指導者クワメ・ンクルマ（1957－1966年）に遡る。彼はこの罪で彼の政敵から告発され、軍事クーデター後にはコフィ・ブシア博士に取って代わられた。後にイグナティウス・アチャンポン大佐（1972－1978年）に打倒されるブシア（1969－1972年）も、コラプションの嫌疑をかけられていた。コラプションに対する学生運動と中流階級の暴動は、その後の体制の盛衰に決定的な役割を果たした――それらはアチャンポンとの闘争の中にあり、1979年から1980年代初頭にかけてはまずジェリー・ローリングスを支持し、後の1980年代には彼の体制を批判したのである。1980年代の構造調整プログラムと、1990年代における複数政党制民主主義とネオリベラル政策への移行が、公共料金の価格上昇とインフラ開発の欠如に寄与してきた一方で、ガーナ人たちは、この国の社会・経済的な病理として「コラプション」を非難し続けたのだ。

4） エレトラ･スティミッリ［Stimilli 2017:120］は、キリスト教のプロテスタントでは「『罪（sin）』としての『罪責（guilt）』というユダヤ教の経験が（中略）完全に「負い目」の経験になった。それは「恩寵」という贈与を通じたものであることから、単純に返済できるものではない。むしろ、投資されるべき条件であるという理由で、キリストへの信仰のなかで扱われる必要があるものなのだ」と論じている。

5） Julor Kwakweについては次の動画を参照。
https://www.youtube.com/watch?v=cVPvQDuWogI

訳注

1） 本論文は、Girish Daswani,“God is Good: Corruption and its Pentecostal Face in Ghana（講演原稿）の全訳である。本論文をもとにした講演（2020年2月21日第904回東京都立大学・首都大学東京社会人類学研究会）をお引き受けくださったこと、本論文の翻訳出版を許可してくださったこと、そして不明点について懇切にご教示くださったことに、記して著者に感謝申し上げます。また、同講演会の企画・開催にあたり、モハーチ ゲルゲイ先生（大阪大学）ならびに髙橋亮介先生（東京都立大学）に格別のお力添えを賜ったことに感謝申し上げます。

2） ネオペンテコステ派とも呼ばれるカリスマ派ならびにその「繁栄と成功の福音」（prosperity gospel）の教説については野澤豊一「米国黒人教会におけるペンテコステ派とカリスマ派――聖霊的実践の普遍性と特殊性」（『人間社会環境研究』22、2011年）を参照。石井美保「聖霊の贈与――ガーナ南部のカリスマ派独立教会における癒しの儀式と女性」（『一橋社会科学』3、2007年）は、ガーナ都市部を中心に実利志向のペンテコスト派教会が興隆する一方で、癒しに特化した独立教会が固有の意義を維持している点とその社会的背景を論じた。

3） 公職者から企業への金銭的要求という古典的なコラプション・モデルから、両者の共謀による「水増し請求」（create, loot, and share）の手口による新たなコラプション・モデルへの変化については、Liedong, T.A., Frynas, J.G. Investment Climate Constraints as Determinants of Political Tie Intensity in Emerging Countries: Evidence from Foreign Firms in Ghana. *Manag Int Rev* 58, p.685.

4） 本論文では単数形のvalueを価値、複数形のvaluesを価値観と訳出している。

5） Pardo 2004、Nuijten & Anders 2007等の内容紹介については、石田慎一郎・吉元菜々子「コラプションの

人類学――若干の覚え書き」(『人文学報』483、2014年)を参照。また、アフリカ諸国のコラプションをめぐる複数の言説の文脈については、味志優「アフリカの「癌」としての汚職理解を超えて――「公」の概念とその動態性への着眼」(『アフリカ研究』91、2017年)。味志は最近の短篇エッセイのなかで、タンザニアの農村で「人々の間で汚職が問題として認識されすぎていることの弊害」を指摘している。すなわち、「人々の間で汚職が問題化されすぎることで、行政的な問題が汚職へと安易に結び付けられ、政治や行政に関する現実的な議論が妨げられているという点である」(同「汚職――アフリカの「癌」という問題化をのりこえて」松本尚之ほか編『アフリカで学ぶ文化人類学』昭和堂、2019年)。

6) ナイジェリアにおけるコラプション言説を分析したビアース[Pierce 2016:20−21]は、オースティン『言語と行為――いかにして言葉でものごとを行うか』(*How to Do Things with Words*)を踏まえて「いかにしてコラプションでものごとを行うか」を論じ、コラプションという言葉を用いることに備わる行為遂行性に注目した。

参照文献

Barber, K.

2018 *A History of African Popular Culture*. Cambridge. Cambridge University Press.

Bloch, M. & J. Parry.

1989 Introduction: Money and the Morality of Exchange. In J. Parry & M. Bloch (eds) *Money and the Morality of Exchange*, pp. 1-32. Cambridge University Press.

Chong, K.

2018 *Best Practice: Management Consulting and the Ethics of Financialization in China*. Duke University Press.

Ferguson, J.

2010 The Uses of Neoliberalism. *Antipode* 41 (1): 166-184.

Nuijten, M. & G. Anders (eds)

2007 *Corruption and the Secret of Law: A Legal Anthropological Perspective*. Ashgate Publishing Limited.

Graeber, D.

2009 Debt, Violence and Impersonal Markets: Polanyian meditations. In C. Hann & K. Hart (eds) *Market and Society: The Great Transformation Today*, pp. 106-132. Cambridge University Press.

Hammett, D. 2018.Engaging Citizens, Depolicizing Society? Training Citizens as Agents for Good Governance. *Geografiska Analler: Series B, Human Geography*100 (2): 64-80.

Hasty, J.

2005 The Pleasures of Corruption: Desire and Discipline in Ghanaian Popular Culture. *Cultural Anthropology* 20 (2): 271-301.

Jackson, J.

2012 'God's Law Indeed is There to Protect You from Yourself': The Christian Personal Testimonial as Narrative and Moral Schemata to the US Political Apology. *Language & Communication* 32: 48–61.

Kroeze, R., A. Vitória & G. Geltner (eds)

2018 *Anticorruption in History: From Antiquity to the Modern Era*. Oxford University Press.

Li, T. M.

2007 *The Will to Improve*. Duke University Press.

Muir, S. & A. Gupta.

2018 Rethinking the Anthropology of Corruption: An Introduction to Supplement 18. *Current Anthropology* 59 (18): 4-15.

Mkandawire, T.

2001 Thinking About Developmental States in Africa. *Cambridge Journal of Economics* 25 (3): 289-313.

Mkandawire, T.
2015 Neopatrimonialism and the Political Economy of Economic Performance in Africa: Critical Reflections. *World Politics* 67（3）: 563-612.
Pardo, I.（ed.）
2004 *Between Morality and the Law: Corruption, Anthropology and Comparative Society*. Ashgate Publishing.
Pierce, S.
2016 *Moral Economies of Corruption: State Formation and Political Culture in Nigeria*. Duke University Press.
Roitman, J.
2014 *Anti-Crisis*. Duke University Press.
Sanchez, A.
2016 *Criminal Capital: Violence, Corruption and Class in Industrial India*. Routledge.
Smith, D. J.
2007 *A Culture of Corruption: Everyday Deception and Popular Discontent in Nigeria*. Princeton University Press.
Smith, D. J.
2018 Corruption and ‘Culture’ in Anthropology and in Nigeria. *Current Anthropology* 59（18）: 83-91.
Stimilli, E.
2017 *Debt and Guilt: A Political Philosophy*. Bloomsbury.
Szeftel, M.
2000 Clientalism, Corruption and Catastrophe. *Review of African Political Economy* 76: 221-240.